

「岐阜県ふるさと教育表彰」実践報告書

市町村名	美濃加茂市		学校名	美濃加茂市立三和小学校		
校長名	遠藤 美和		対象学年	全校	人数	34人
項 目	○	① 小・中学校の関連性や発展性を踏まえた実践や、幼稚園、高等学校、特別支援学校等と連携を図った実践				
	○	② 県内施設や地域人材等の外部資源を活用し、岐阜県が誇る自然・歴史・文化・産業等の体験を通して学ぶ取組を効果的に位置付けた実践				
	○	③ ふるさと学習を核として、総合的な学習の時間と各教科、特別の教科道徳等との関連を図った教育課程を編成し取り組んだ実践				
該当する項目1つ以上に○を付ける						
学校の教育目標	心豊かで 自ら学び やりぬく子					
活動のねらい	三和の自然の恵みを体験し、それを守り、生かそうとする人々に学び、すばらしい自然の恵みを、未来に生きる人々のために、責任をもって使うような社会を創っていかうとする心情や態度を育む。					
[地域人材等の教育資源を活用した特色ある活動【三和学】] 素晴らしい自然と温かい地域の人々との触れ合いを通じて、未来志向の学びを創り出したいという願いから、三和小のふるさと学習を「三和学」STEAMS 教育として再編成した。						
[活動の概要と児童生徒の変容]						
1 三和の自然体験から学ぶ						
(1) ホタル保護活動 昭和43年の豪雨災害の後、ホタルが飛び交う環境を取り戻そうと、三和町住民で源氏ボタルの保護活動に取り組んでいる。学校が担当するのは、幼虫を育てて川に放流することと、三和のホタルのPR 活動である。親ボタルの捕獲から、カワニナ捕り、川の清掃など、三和の「源氏ボタルを守る会」の方々や保護者と一緒に活動を進めている。PR 活動では、保護者と一緒に、観光客に三和小のパンフレットや、児童が描いたホタルのイラストをプリントしたクリームサンドを渡ししながら、三和のホタルについて観光客に紹介する活動を行った。「三和は、とっても素敵などこですね。」などの感想を聞いて、三和に対する誇りを育てる活動になった。						
(2) 生命のプログラム 美濃加茂市蜂屋町在住の田畑や山林を整備し、人がその場所と関わることのできる様々な体験を実施されている方の提案で、これまでの田んぼでの稲作体験に加え、田んぼ、川、畑の生き物観察を通して、環境と生き物との関わりについて知り、水槽でビオトープ作りを行って生き物の循環を学んだ。この学びを生かして、校内にあるビオトープの整備を進めていくことで、生き物が住みやすい循環する環境作りに取り組んだ。						
(3) 富士山パワーを三和小へ（里山整備と持続可能なエネルギー） 中部国際医療センターと岐阜デイトナライオンズクラブが連携して三和町地域の里山環境整備を進めている。12月には、里山整備&健康ウォーキングに参加して、美濃加茂市にある標高357mの富士山の整備に取り組んだ。森林組合の方や、加茂農林高校の生徒も参加し、林業に携わる方の専門的な仕事ぶりに触れることができた。樹木を伐採して薪にして、みのかもバイオマス発電所に売却し、サッカーボールを購入予定である。						

(4) 里山体験学習

美濃市のモリノスの方の提案によるプログラムを年間3回実施。三和町の富士山への登山道付近の里山で自由に遊ぶ中で、自然を知り、自分で考え、責任ある行動をとることを、自ら学んでいく。子どもたちが、自由な発想で遊びを考え、仲間と取り組むことは、実に楽しい活動である。同時に、自然の中で活動することで、安全を守ることも体験を通して学ぶことができ、自立につながる活動ができた。

(5) 加茂高校生による模擬授業

里山を題材とした漫画を使って、里山やSDGsについて学ぶワークショップを開催。教員を志望する加茂高校生が、漫画を使って子どもたちが身近な話題で考えることができるように工夫されており、異年齢での有意義な学びができた。

2 みんな(学校・家庭・地域)の笑顔のために行動する

(1) キッズフリマ参加

昨年度、運動場にヤギ小屋を設置し、世話を始めて2年目になる。給食センターから野菜の切れ端等をもらい受けてエサにしているが、長期休業中のエサ代が必要である。そこで、地元の喫茶店が主催するキッズフリマに参加し、学校田で育てたもち米をポン菓子にして、自分たちが作ったラベルを貼って販売した。自分たちでできることを工夫してやってみようという意欲につながっている。

(2) 唐辛子づくりからイタリア文化体験につながる

キッズフリマの体験から、唐辛子を育てて市内のイタリアンレストランに販売し、ヤギのエサ代にしたいという思いをもち、活動が始まった。育てた唐辛子は、辛さが少し足りず、販売するまでには至らなかったが、つながりを生かして、イタリア人のシェフからピザ作りを学び、石窯で焼いたピザを食べたり、イタリア語の体験をしたりと、楽しい活動をすることができた。自分から行動することで、人がつながっていけることを学んだ。

(3) 異年齢での対話

教師や大人が決めたことをやるのではなく、異年齢での対話を通して、課題解決に取り組む学びを充実させた。コロナ禍では、一輪車演技の発表が中心であった運動会を、子どもたちの願いから、赤白の組を作り、リレーや玉入れなどの競技を行った。「みんなが笑顔」の「みんな」には、保護者や地域の方も含まれるという意見から、参加型の競技を作り、みんなが楽しめるように企画した。また、ヤギの飼育では、隣のオリーブ牧場のヤギの世話について、オリーブ牧場の方の思いを知り、自分たちにできることを考え、有志で活動を進める。

(4) 能登半島大雨災害募金活動

6年生の思いから、美濃加茂市の能登半島大雨災害義援金の活動に協力しようと募金活動を行った。10月19日の運動会でも協力を呼びかけた。昭和43年の三和町での8・17豪雨災害では、県や国からの援助で三和町が復興したこともあり、自分たちができる支援を考えて行動につながることができた。

[今後に向けて]

体験から感じたことを、対話を通して他者と共有して学びが生まれ、共通の課題を見付け、その解決に取り組み始めている。子どもたちが主体の未来志向のふるさと教育を進めていきたい。